

私は生まれつき耳が不自由です。家族と一緒にテレビを見ていても私だけ内容が分からず、幼い頃から寂しい思いをしていました。一対一の会話なら、補聴器の力を借りながら口の動きを読み取ることで、何とか話の内容を理解できますが、大勢での会話はお手上げでした。

小学校から中学2年まで地元・名古屋市の学校に通いました。ろう者は私1人。中学校では話題が頻繁に変わる女子生徒の会話に入っていけず、仲が良かったはずの友達から次第に冷たくされるようになりました。

「私の気持ちは誰も分からない」。心を閉ざし始めた頃、親が勧めたのが市内のろう学校への転校でした。転校先では当時、身につけていなかった手話でのコミュニケーションが当たり前。カルチャーショックを受け、

学びのふるさと



映像作家 今村 彩子さん

「生徒会長をやってみないか」

ふさぎ込む私に、ろう学校の担任

「ここにも居場所はない」と思い込み、テストに白紙の答案を出したこともありました。卒業後は千葉県のろう学校高等部に進学し、バレーボール部に入りますが、先輩に「生意気

だ」と嫌われて退部。寄宿舎暮らしのため逃げ場はなく、1年足らずで今度は愛知県豊橋市のろう学校に移りました。今振り返れば、ここが人生の転換点でした。独りぼっちでふ

「生徒会長をやってみないか」と声をかけてきました。いったんは断りましたが、熱心な出馬要請に負けて立候補すると、結果は当選。文化祭を成功させ、先生たちから「今村のおかげだ」

いまむら・あやこ 名古屋出身。愛知教育大学卒業、大学在学中に米国留学し映像制作を学ぶ。ろう者を中心にドキュメンタリーを制作している。作品に「音のない3・11」や「珈琲とエンピツ」など。34歳。

さぎ込む私に毎日声をかけてくれたのが担任の山本全美先生。20代後半の冗談好きな男性で、いつも笑顔で接してくれ、私も次第に打ち解けていきました。そんなある日、先生が唐突に

まず踏み出すことが大切

と褒められた時は本当にうれしく、気がつけば表情も明るくなっていました。ずっと問題児でしたが、本当はみんなと仲良くしたい。本音をお見通しの先生が、いやだなしに周りとの意思疎通が必要な立場に就けることで思いを実現してくれた。先生の言葉から、思いをため込まず、まず踏み出すことの大切さを学びました。東日本大震災直後に宮城県に入り家を津波で流されたろう者のドキュメンタリーを撮影しました。きっかけはろう者の死亡率が障害者を持たない人よりも高い、という統計結果。現場で何が起きているか確かめたい。行動を後押ししてくれたのも先生の言葉でした。先生とは今もメールをやり取りする仲間。作品を楽しみにしてくれています。(聞き手は安原和枝)